



し おも
『死を想え』

もう古い話ではありますが、「人生時間」ってありましたね。平均寿命を72歳と仮定して、それを一日24時間とみなします。つまり年齢を3で割ることによって自分の人生を計るというものです。私は63歳ですから(63÷3=21時)夜の9時頃を生きているのです。もう残された時間はわずかですね。18歳なら朝の6時、30歳なら10時、78歳なら翌日の午前2時という具合です。とても大雑把ではありますが、自分の人生を一日に換算したら今何時頃を生きているのかが緊張感を伴って見えてきます。この緊張感がとても大切なような気がします。

一昨年、105歳で亡くなられた聖路加国際病院名誉院長の日野原重明先生は「いのちは私たちの持っている時間です」と、子ども達に教えておられました。その上で「自分のためだけに時間を使わずに、これからはだれかのために時間を使ってください」と語りかけられたそうです。また、20年ほど前ですが、「死を想え(メメント・モリ)」というセミナーでも先生は「死は生の同一線上にあるのです。それに気づかなければ死への心の準備ができません。つまり、いのちを輝かすことはできません。」と壇上で語られたのを記憶しています。“死を想う”とは単なる終活ではなく、いのちを生ききるために、いのちを輝かせるために今をどう生きるか、なのです。

1月31日に猫の“とく”が数えの二十歳で死んでしまいました。長い間、正光寺を訪れる人たちを出迎えては見送る一生だったように思います。そしてその4日後、柴犬の“テラ”が18歳で死んでしまいました。いい漢(やつ)でした。いずれもきわめて静謐な死であり、彼らから改めていのちを教わった気がします。